

坊刊戯曲書の評について

——いわゆる李卓吾評本とは——

傳田 あつ子

はじめに

明の嘉靖以降、戯曲書の出版は盛行期を迎え、伝存するもの、存目のみのもの合わせて、おびただしい数が刊行されている。その中で、特に万暦中期以降、当時の著名な文人の名を冠して「○○題評」、「○○批点」などと題して、戯曲本文に評語、注釈、校勘等を付して刊行されるものが増えた。もちろんそれらの中には、その内容が確かに本人の編著に出るものであり、書物としての刊行もまた本人の意図・企画に発していると思われるものも少なくはない。金聖嘆評本『西廂記』などは、一つの文学作品としてその評者の専著と同等に扱うことのできるものであり、したがってまたその人と文学を考える上で拠りどころとするに足る第一級の資料と認められるものである。

しかし一方では、刊行の当時からすでにその偽託が疑われてきたものも多い。有名人の名前のもつイメージにさそわれて、本を購読するという現象は現在でも見られるところであるが、明代坊間の出版物にも、そうした効果をねらった偽託書の多かったことは、これもまた事実として認識されなくてはなるまい。量の面からだけでいうなら、この時期の戯曲書に対するときにはむしろまずその偽託を疑ってかかるのが資料評価の本筋と言ってもよいのである。とりわけ李

卓吾批評本、徐謂評本、玉茗堂批評本などは、同時代における知名の度合、權威から言っても最も偽託の効のあるものであり、複数存在する評本の内容が異なり、評語の文そのものも相互に異なることが早くから指摘されている。しかし、それにもかかわらずそれらの人物の文学史上に占める位置の高さもあって、今日でもそれを真と認めようとする、あるいは真なる部分を捜し求める所論はなお少なくない。

本論文は、その真偽がもっともやかましく論議される李卓吾評本をとりあげ、単にその評語の文を云々するのではなく、この種の坊刊戯曲書の作られ方、その刊行のプロセスにたちもどって、あらためて検討しようとするものである。李卓吾評を否定し、偽託とする見地から論述する。

李卓吾評本は、明刊本戯曲書の中で最も疑問と問題の多いもので、過去に偽託説をとなえるものは一、二にとどまらない。そのなかで、錢希言のいうところは注目値する。

最近盛行の溫陵李贄の本は梁溪の人葉陽開、名は昼なるものが模倣して、つぎつぎと板刻して溫陵の名に託して刊行したものである。袁小修を訪ねたところ、中郎が私に李贄の『藏書』、『焚書』、『初潭集』、『批点北西廂』の四部をあげたことがある。すなわち中郎が見たのもこれだけなのである。数年前溫陵は事に破れ、当局がその書物を廃棄するように命じて、吳中の刻藏板木はすべて廃棄されたが、近年また大いに流行している。そこで李宏父批点の『水滸伝』、『三国志』、『西遊記』、また『紅払』、『明珠』、『玉合』など数種の伝奇および『皇明英烈伝』があらわれたが、いずれも葉の筆になるものであり、李とは関わりはない。（『戲瑕』卷三「膺籍」）

偽託本の作者の名を特定し、真・偽それぞれの書名を明確にあげて、きわめて具体的な記述である。この葉昼については周亮工も述べている。

葉文通、名は昼、無錫の人である。たくさん本を読み、才気があった。二氏の學問に心酔し、そのため奇異な行動があった。(中略) 溫陵『焚書』『藏書』が盛行した時、坊間でいろいろと溫陵の名を借りて刊行されたもの、たとえば四書の第一評、第二評、『水滸』『琵琶』『拜月』の諸評は、みな文通の手に出たものである。(『因樹屋書影』) しかし一方ではまた李贄が戲曲書を評校したことをうかがわせる記録も残されている。万曆二十年の劉東星『藏書』序には、「先生は手から書物を放さず、終日抄写して、自身それを批評し、圈点をつけ、唱い、讀したが、人に見せることはしなかった。」とあり、李贄自身が焦竑に与えた書簡にも、「ただ朝夕に書を読み、手は書物を離すことなく、筆は揮うのをやめることなく、五十六歳から今年七十四歳になるまで、毎日このように過ごしてきただけである。門を閉ざし、たくさん書を書き、人に会う暇もなく、人に教えるにいく暇もないのに、(後略)」(『統焚書』卷一「与焦弱侯」と読書三昧の日常を送っていることが記されている。別の焦竑あての書簡(万曆二十五年夏、大同より)で李贄は次のように書き送っている。

古今の至人の遺した書物を書き写し、圈点をほどこしたものがかなりの数になります。そのすべてを貴兄のもとにとどけて、教えを請うことができないのが残念です。(中略)『水滸伝』を批点できてとてもうれしい。『西廂記』、

『琵琶記』の塗抹改竄もさらにすばらしいです。(『統焚書』卷一「与焦弱侯」)

李贄はこれらの本を是非とも袁中郎に見てもらいたいのだという希望を切々と訴えている。

万曆八年五十四歳で官を辞してから、耿定理をたより、湖北省黃州府黃安県において共に講學に従事し、読書と著述に専念していた李贄は、万曆十二年耿定理死亡の後、家族を郷里に帰し、単身、湖北省黃州府麻城縣竜潭畔の芝仏院に身を寄せ、読書三昧の日を送り、著述に専念し、批評家として活躍を始める。『焚書』の出版は万曆十八年のことである。万曆二十七年、『藏書』六十八巻が南京で出版され、これが投獄の禍を招く一因となる。翌二十八年、麻城の反対

派により芝仏院は焼討ちにあい、死後のために用意した埋骨塔も焼失して、難をのがれた李贄は馬経倫に伴われて、河南省商城県の黄檗山中にかくれた。

退官から焼討ちまでの間に、戯曲小説の「校勘」、「批点」を施したという事実は動かせないところであろう。本を贈られた側の袁中道も、「読んだ書物はすべて抄写して善本をつくり、東国の秘語、西方の靈文、離騷や(司)馬(遷)、班(固)の史書、陶(淵明)・謝(靈運)・柳(宗元)・杜(甫)の詩、下は稗官小説の奇、宋元名人の曲にいたるまで朱筆を揮って一字一字校勘し、精密に分析してしばしば新見解を示した。」(「李温陵伝」)と述べている。

三十年二月、張問達の弾劾によって李贄は逮捕、投獄される。彼の刊行した諸著書およびその家に蔵してまだ上木してない著書を搜し出してことごとく焼却処分⁽¹⁾に付するよう勅旨が出され、実行されたという。三十年三月李贄獄中に自死、死後に彼の批点本が残された確率は極めて少ないが、袁中道の日記「遊居柿録」には、「夏道甫の処で、李竜湖批評『西廂』、『伯喈』を見たが細密をきわめている。真に読書の人である。」という記述があり、李氏没後九年、李贄評の『西廂記』、『琵琶記』が夏道甫の手にあったことがうかがわれる。しかし、それが李贄手抄の原本であったか、また原本であったとしてそれが果して刊刻されたかはわからない。

現在、いわゆる「李卓吾先生批評」として伝存する戯曲書は二十種ほどがある。

- 1 『李卓吾先生批評古本荊釵記』二巻 万曆間容与堂刊 東京都立日比谷図書館・北京図書館蔵
- 2 『
幽閨記』二巻 万曆間容与堂刊 北京図書館蔵 『古本戯曲叢刊初集』所収⁽²⁾
- 3 『李卓吾先生批評金印記』二巻 明末刊 国立中央図書館蔵 (三刻五種)
- 4 『
香囊記』二巻 明末刊 国立中央図書館蔵 (三刻五種)

- 5 『浣紗記』二卷 明末刊 国立中央図書館蔵 (三刻五種)
- 6 『鳴鳳記』二卷 明末刊 国立中央図書館蔵 (三刻五種)
- 7 『繡襦記』二卷 明末刊 国立中央図書館蔵 (三刻五種)⁽³⁾
- 8 『紅舢記』二卷 万曆間容与堂刊 宮内庁書陵部・北京図書館蔵
- 9 『玉合記』二卷 万曆間容与堂刊 宮内庁書陵部・北京図書館蔵 『古本戯曲叢刊初集』所収
- 10 『錦箋記』二卷 明刊 北京図書館蔵
- 11 李卓吾評本『焚香記』⁽⁴⁾
- 12 『玉簪記』
- 13 『元本出相南琵琶記』三卷 李贄評 明刊 静嘉堂文庫蔵
- 14 『李卓吾先生批評琵琶記』二卷 万曆間容与堂刊 北京図書館蔵 『古本戯曲叢刊初集』所収
- 15 『元本出相西廂記』二卷 李贄王世貞評 万曆三十八年起鳳館刊 北京図書館・天理図書館蔵
- 16 『李卓吾先生批評北西廂記』二卷 万曆間容与堂刊 宮内庁書陵部蔵
- 17 『重校北西廂記』二卷 万曆間三槐堂刊 天理図書館蔵
- 18 『李卓吾批評合像北西廂記』二卷 李贄評 万曆間游敬泉刊 天理図書館蔵
- 19 『李卓吾先生批評西廂記』二卷 万曆間 潭陽劉応襲刊
- 20 『李卓吾先生批点西廂記真本』二卷 李贄評 崇禎十三年天章閣醉香主人刊 北京図書館・天理図書館等蔵
- 21 『三先生合評元本北西廂』五卷 湯顯祖李贄徐謂評 崇禎間彙錦堂刊 北京図書館・国立中央図書館蔵

李卓吾評を称する戯曲書のうち、刊年の明らかなもので最も早いのは万曆三十八年刊の起鳳館刊『西廂記』であり、これは李卓吾の死後八年である。他に万曆間刊とは見られるものの、刊年を明記しないものが多いが、李贄の生存中の刊行と断定できるものはないようである。まずは「呉中の刻蔵板木はすべて廃棄された」後に「近年また大いに流行したものと見てよいであろう。

一

李贄『焚書』卷四「雜述」にはそれぞれ「玉合」、「崑崙奴」、「拜月」、「幽閨記」をいう、「紅牀」と題する四篇の短文が並んでいる。いずれもその内容は札記、読書ノートといった趣のものである。

この劇は「関目」がすばらしく、語り口がいいし、曲もまたいい。真に元人の筆になるものである。はじめは散漫に見えるが、終わりは奇絶となる。『西廂』と並べても遜色はない。自ら天地とともに終始すべきものであって、この世界があるかぎり、この伝奇をはなれることはできない。（「拜月」）

「関目」は、劇の筋立て、構想といった意味合いで用いられる。

この劇もまた多くの曲折がある。しかし、緊要なるべき処が逆に緩慢であり、平凡であって、そのためそのよさが十分に発揮されていないのである。しかしまた、面白さというものを知らないといわないわけにはいけないのである。（「玉合」）

この劇も「関目」がよく、曲がよく、せりふもよく、「事」もよい。（「紅牀」）

「事」とは、「玉合」でも「韓君平が柳姫に出会う、その事はいへん奇である。」というように、演じられる事件、題材である。

以上のように李贄の論はまずそれぞれの劇の総括的な評価で始まるが、「崑崙奴」にはこの部分がない、次に具体的なストーリーの内容にふみこんでその構成をたどりながら、登場人物・ストーリーの分析に入る。

詳しくこれを読んでみれば、人をして兄は兄の道をつくし、妹は妹の道をつくし、それぞれに義夫節婦であるという思いを抱かせるに相違ない。(王瑞) 蘭は崔(鶯鶯)よりも名を重んじた。このところはわけても閑雅であり、事は不可抗力からおこったものであるのに、なお天に誓いをたて、終始違背することなきよう願うのは、真正の極みというべきである。(陀滿) 興福が林莽に流されて恩を知り恩にむくいるのは常理である。ついに最後は良縁で結ばれ、許して妹に帰し、興福は妹の夫となり、(蔣) 世隆は妻の兄となる。徳は必ず報われ、恩は必ず答えられる。天の善人に報施するは、またなんとその巧みなることか。」「(拜月)

前掲の冒頭部分につづいて以上が「拜月」のほぼ全文となるが、容与堂本『幽閨記』にはこの一文が「拜月亭序」と題をつけて巻首に付刻されている。

同じく容与堂本『玉合記』巻首にも「玉合」全文がやはり「玉合記序」と題されて付刻されている。⁽⁵⁾ 前掲に続く部分は以下のようになる。

韓君平が柳姫に会う、その事は大変奇であるが、もし両奇人に会わなかったとすれば、それは奇といってもただそれだけのことである。これが昔の人が縁なきを恨んだ理由である。(後略) (玉合)

この二つの「序文」はやはり序文としての形式をそなえていないように思われる。すなわち、『焚書』の四篇の戯曲論は、本来序文として書かれたもの、戯曲書刊刻に際して書かれたものとは認めにくいのである。

他によく例を見るように、その本を刊刻するに至った経緯について触れること、末尾にそれを書いた時・処を記して署名することなどは、この種の序文に不可欠のこととはいえないだろう。しかし、この四篇の文は、何よりもまずそれ

それが一つの独立した文章としての首尾完結をそなえていない。「崑崙奴」は、四篇中最も長い文であるが、はじめからその「事」を論じ、主人公の「俠」について述べるだけで終わっているが、冒頭は次のように始まる。

許中丞はほんのわずかの間に計略をもって柳姫を手にいれ、玉合重円をなした。崑崙奴は時に当たって力を尽くして紅綃を奪い、さまざまの困難もこれを阻むことはできなかった。これはみな天地の間に緩急それぞれに有用の人物であり、だから俠というのである。(崑崙奴)

許中丞は『玉合記』の登場人物であり、これはまったく『焚書』巻四で前項に並ぶ「玉合」から連続した文章といふべきものである。この四篇の戯曲論はその構成に個々に独立して書かれた文としての差異が見られない。個別の刊刻の「李卓吾評本」の序文を連続して一氣に書くなどということは不自然なことである。この四篇はやはり李贄がこれら一連の作品を読んで記した札記、批評ないしは感想の文である。

以上のように容与堂刊『幽閨記』、『玉合記』の序文は、その本の刊刻者が、『焚書』の文を好都合として序文に利用したものに過ぎないとみてよいであろう。容与堂本『紅弘記』には李贄序のついた本は発見されていない。⁽⁶⁾『崑崙奴』はすでに本が失われていて、容与堂では出版できなかったものとも推測できる。また、この容与堂刊『幽閨記』、『玉合記』を除いて他の伝存の李卓吾評戯曲に李贄署名の序文の付刻されているものはないようである。異本の多い『西廂記』にも李贄序文をつけたものはない。⁽⁷⁾

李贄はその評校した戯曲書に刊刻のための序文を書いていないと見るべきである。袁中道らの記録するように李贄には確かに戯曲書の評校の作業が数篇あったのだろうが、自らその刊刻を企図したことがあったとは思われない。

李卓吾評本の戯曲本文はどういうものか。複数の異本のある『西廂記』について検討してみよう。諸記録からみて『西廂記』は李贄が実際に評校をしたものがあったと考えられる。

李卓吾評を標榜する雜劇『西廂記』の刊本は次の七本が知られている。

起鳳館刊本 (李贄・王世貞評、万曆三十八年序刊)

容与堂刊本 (万曆三十八年刊?)

三槐堂刊本 (万曆間刊)

游敬泉刊本 (李贄・王世貞評、万曆間刊)

醉香主人刊本 (崇禎十三年序刊)

彙錦堂刊本 (李贄・湯顯祖・徐謂評、崇禎間刊)

劉応襲刊本 (万曆間刊)

このうち、所在不明の劉応襲刊本を除いて他の六本の戯曲本文を校合すると、これらは三グループに分けることができる。

A、三槐堂刊本、游敬泉刊本

B、起鳳館刊本、容与堂刊本、醉香主人刊本

C、彙錦堂刊本⁽⁸⁾

もちろん個々の本の間にはさらに一、二字の細かい差異を見せる箇所はなお多いのだが、ストーリーの進行、それぞれ

れの曲と白の配列のレベルではぼこの三種に分けてよい。単純な書写・刻字の誤りから来るような異同ではなく明白に異なった校訂の手が入っているものと認められる差異である。

この、同じく「李卓吾評本」を標榜しながら戯曲本文の異なる本が万暦期にすでに並存しているという事実をどう考えるべきか。その最も素直な解釈は、やはり李贄が評校した『西廂記』の戯曲本文は伝わらなかったということになる。もしその「真本」が伝わっているならば、李贄の名声・権威からしてもこの李校本文と李卓吾評が一体となった「真本」以外に（翻刻本は当然あってよいが）、異なる戯曲本文をもつ異本が李贄の死後まだ間もない時期にすぐに出現するなどというのは全く不自然である。

伝存の実状はさらに混乱している。異なる戯曲本文と異なる「李卓吾評」評語の組合せがこれまた各本で交錯している。例えば起鳳館刊本、容与堂刊本、醉香主人刊本の三種は、B類として戯曲本文は同一系統のものであるが、その評語は相互に全く異なるものである。逆に戯曲本文の系統がことなる起鳳館刊本と游敬泉刊本が同一内容の「王李合評」眉批を付けている。

起鳳館刊本の巻首に載る「新校北西廂記考」の末則は簡潔にこのような状況の由来を語ってくれる。

一、李卓吾先生の批評 先生は古今を品評して、その一字は一冊の史書にも匹敵するものであり、すべて『焚書』『藏書』等の篇に載っている。『西廂』の遺筆は遊戯三昧に出たものであるが、最近雪堂の笥中にあつたのを入手した。

いま問題にしたいのはこの「考」のいうことの真偽ではなく、起鳳館刊本も含めて全ての李卓吾評『西廂記』の中に、正面からその戯曲本文が李贄の校改になるものであると明言するものが一つもないということである。李卓吾評とはその評だけが伝えられたものとしてあるという暗黙の了解が前提にあり、相互に異なる評のいずれが「真筆」である

かを競つてみせるということになるのである。

戯曲書の評、それも一つの作品を全体としてとりあげての作品論ではなく、個別の齣、さらにその中の短い一段の曲文、白文につけられた評語が、その本文と切り放されて評文だけ伝わるということは、この時代の本の刊刻あるいは抄写のありようから推測すれば、はなはだ異例変則のことであり、信じ難いことである。

「李卓吾評」の評語には相互に異なる数種があるのだが、負の命題ではあるが共通することが一つある。それはいずれにもほとんど全く本文の校訂について述べる校語が見あたらないということである。⁽⁹⁾これも前述の諸記録にみる李贄の校訂への意気込みと対置するときわめて不自然に思われる。やはり「李卓吾評」は李贄がある底本を選んでその本文校訂、批評を行ったのとは全く別の時・所で書かれた文章であり、葉昼あるいは他の偽作者がそれぞれできあいの本に評語だけを考案したものと考えてはじめて納得がいくように思われる。

再度引用するが、李贄は「水滸伝を批点できてとてもうれしい。西廂記、琵琶記の塗抹改竄もなかなかすばらしいでさです。」と自ら述べている。ここでは「批点」と「塗抹改竄」は対句表現で用いられているが、いずれにしても「塗抹改竄」というのは戯曲小説作品本文に手をいれることであって、たまたま手元にあった本に単に批点をうち、評語をノートするだけのことではない。またかりに底本にすでにあった先人の評語だけを書き換えたとして、そのようなことを西廂記、琵琶記を「塗抹改竄」したと言うことはまず考えられない。

この時期、力量のある評校者が戯曲小説を読むということは、自らの考えにたって底本を選び、その本文を「塗抹改竄」して自らの本を作ることの意味した。それは校訂者自身の文学の実現という側面を濃厚に持つ作業である。王驥徳、凌濛初がそうであり、金聖嘆はまさしくその最たるものである。

「李卓吾評」本戯曲に校語の類がほとんどないことを根拠として、李贄が『西廂記』（あるいは加えて他の作品）の本文

校訂はしなかったのだと推論することはできない。それは論証の順序が逆であり、あくまで結果としてこのような評語が生み出された原因がまず追求されなくてはならない。戯曲本文との関わりからみて結論をいうなら、このような校訂を欠く評語は、戯曲本文の校訂を意図しない、できあいの本に書肆がその時々⁽¹⁰⁾の流行の形式で適当にそれらしい評をつけるというだけの作業の結果として生みだされたもの⁽¹⁰⁾と考えるべきである。

三

これまで見てきたところで、「李卓吾評」と称されるものの基本的な性格は明らかになったと思うが、最後に評語そのものをどう読むべきかについてふれておきたい。

起鳳館刊本（さらには游敬泉本）の王李合評の批注は明らかに先行諸本のその「雜炊」であり、これを真の李卓吾評と見るものは少ない。そこで、とりあげられるのが同じく万曆三十八年の刊行かと推定される容与堂刊本である。⁽¹⁰⁾

たしかに容与堂刊本は、各齣末に「総批」として長いもので十数行の批文を掲げ、眉批としても独自の（先行本にみられるものの切り貼りではないという意味で）批語を記して、万曆前期のそれとは異なる、一新された整った形式を見せている。

しかし、形式という面だけから言えば、これは容与堂刊の他の戯曲にも共通する体裁である。この形式が読者に好まれて流行を呼び、容与堂刊行の一連の戯曲シリーズを生みだしているのだが、この形式の創出を李贄と結び付けなければならぬ理由は見あたらない。陳眉公本『西廂記』にもほぼ同様の形式が見られるように、同時期の他の書梓にも広く流行が波及しているのを見ると、かえって真似される「李贄評」が軽く見えて来る。また刊年が最終的には特定できない容与堂本が、はたしてこの形式の創出者であるかどうかさえ定かではない。同時期の王驥徳の校注本のようにきわ

めて個性的な形式内容を備えた単刊本と見比べると、このような坊刊シリーズ本を刊刻書梓の関係者とは別の、異なる時期の個性——李贄とむすびつけて考えるのは難しい。

このほかに崇禎刊の西陵天章閣刊本があるが、この評語は起鳳館刊本、容与堂刊本のいずれともまた異なっており、評語の量も少なく、その内容にも見るべき物が少なくなっている。挿図の形式なども、天啓・崇禎年間に入って、戯曲書の体裁、その流行が万暦期と比べてまたひとつ変化した後のものであるが、この時期になって初めて真の李卓吾評が世に出たと考えるのは難しい。

容与堂本の評が李卓吾のものであるとする論⁽¹¹⁾の中で言われるのは、李贄の文学論の中核をなす「雑説」(『焚書』卷三「雑述」と容与堂本の「総批」)の論の一致を理由とするものである。第六出の評語「文はすでに自在の境地に至った。」と第十六出の評語「文章はここに至って、更にこれ以上の文はない。」は、「雑説」にいう「化工」の意を含んでいること、第十出の評語「文字は喉中からほとばしるごとく、添削改竄のあとは見られない。」は、「雑説」にいう「その喉の奥には吐こうとしてもどうしても吐ききれないものがあり、その口にはいつも多くの語ろうとしても語りようのないところがある。それがうっ積を重ねてとどめようもない勢いにたち至る。」とが基本的に一致していることなどをあげられる。

このような文章の比較は、一種の印象評価の範囲をぬけられない。これらが李贄が書いたものであって、葉昼(あるいはそのほかの誰かが)が書いたものではないという断定は、結局のところはできない。ある程度李卓吾の著作に通じている者ならば、このくらいの作文はできると考えたら、もはやこのような印象評価で論をすすめることはできなくなる。

また陳眉公本の評に一部容与堂本の評がそのまま入っていることが指摘され、「陳眉公本の批語の作者は容与堂本の

毎出の総批を研究しているだけでなく、李卓吾の『焚書』を研究しているのがわかる。⁽¹⁾と論じられている。陳眉公本を容与堂本におくられて刊刻されたものと直ちに断定してよいかどうかはともかくとして、このような説明は、もちろん容与堂本の評は李贄によって書かれたものであることをなんら論証するものではない。容与堂本もまた「李卓吾の『焚書』を研究して」書かれていると言ったそれまでである。

むしろここで問題とされるべきなのは、一部ではあっても、同一の評語が容与堂本と陳眉公本の両者に見られるということであろう。李贄の死後十年前後であるが、「李卓吾評」が簡単に「陳眉公評」となってしまふあたりにこの種の坊刊「評本」の評語の質が露呈しているとみるべきである。一時期前の刊本に多く見られる、先行本の「釈義」を適当に切り貼りしてまた一本を作るといふやり方が、流行が変わって今度は評語でなされているだけのことではないだろうか。

このような状況を見れば、もはやその評語を直接李贄の書いたものということとははばかられ、李贄の「影響を受けている」というような表現がされることになる。しかし、影響となればいったどこまでが李贄のそれでどこからがそうでないのか、議論はますます曖昧なものになるほかはなく、ここまで来ればもはやこれらの評語は李贄にかかわるものとしての資料価値を全く失うだろう。

次に疑問を感じさせられるのは、「妙」「奇」などの短い評語の多用連発である。論者が李卓吾評の核心とみている容与堂本『西廂記』のわずかに二十齣の「総批」のなかにも第三、十七、十八齣で「妙」の語が用いられる。それも長文の中の一語ではなく、ほとんどそれだけで一齣の「総批」となる。

如見、如見、妙甚、妙甚。(第三齣)

寄物都是寄人去。妙、妙。(第十七齣)

妙、妙。見物都是見人來。（第十八齣）

眉批にはさらに多く見られ、『幽閨記』など他の本も同様であり、さらにまた李卓吾評以外の坊刊本にも広く見られ、この時期の流行の一つとなっている。この軽さをもまた李贄に発するものと見なければならぬのであろうか。

戯曲書の李卓吾評といわれるものは実はそれほど内容量のあるものではない。容与堂本『西廂記』の総批のうち、最も長いものでも七十字を超えることはなく、しかもそれはわずかに数齣で、他はすべて一行十字程度の短文である。眉批にいたっては一行三字、一則にどれほど書けるものではない。

本来の李贄の述べるところをみてみよう。

わたしは聞いている。足の速い馬は決して牝か牡か、黒か黄色かなどということによつては測れない。声応氣求の夫は決して細かい文章表現にとらわれているような人ではない、風行水上の文は決して一字一句の奇にあるのではない。

結構の密だとか、対句が適切だとか、理と道によるとか、規範にのっとっていると、首尾相応じているとか、虚実生ずとか、いろいろな欠点か文について語られるが、天下の至文を語ることとはできない。雜劇院本は遊戯の上乗である。『西廂』『拜月』には何の「工」もない。

けだし工なること『琵琶』より工なるはない。かの高生は力を費やして、巧みさを發揮したが、才を極めてついに涸渇している。作者は巧を窮め、工を窮め、余力を残さない。語尽き、意また尽き、詞尽きて、その味わい索漠として、かわいている。私は昔琵琶をとつて弾じた。一弾して嘆き、再弾して怨んだが、三弾するに及んでさきの怨み、嘆きはもはやなかった。なぜか？ その真に似て真に非ざる故ではなからうか、そのため、人の心に深くしみ通っていかないからである。工巧の極といえども、その力には限りがあり、ただ表面の皮膚骨肉の間にしかとど

かず人を感動させることが少ないのも怪しむに足りない。『西廂』『拜月』はそうではない。おもうに宇宙のうちにこのようなすばらしい人がいるのであって、化工の物に於ける、その工巧、おのずから不可思議なものである。

〔焚書〕卷三「雜說」

戯曲作品の一段、さらに短い一条を批評する評語の場合、その長さや文体、さらには論そのものにも当然ある種の制約が加わるだろう。評価する側の目もどうしても個々の「総批」の文、それも多くは用語の一致や類似に向けられがちである。しかし、「李卓吾先生批評」を李贄と結び付けて評価するには、やはり李贄の文章のもつ本来の息使い——それは「徹底した合理主義」、「特殊性尊重」⁽¹²⁾ というものに裏打ちされている——というものを、李贄という人の人物像をほうふつとさせるオリジナリティを、見つけだしたいものである。そしてそれは「総批」と「眉批」全体を見渡す中で見つけだされるべきものであり、さらには李贄が『西廂』の物語をどうとらえたか、どう書き改めたか、本文の「塗抹改竄」からこそ捉え出されるもののはずである。偽託の「李卓吾評」本にそれは求むべくもない。

注

(1) 《日知錄》十八〈科場禁約〉「萬曆三十一年日月、禮部尚書馮琦上書、頃者皇上納都給事中張問達之言、正李贄惑世誣民之罪。盡焚其所著書。其崇正闢邪甚盛舉也。」

(2) 鄭振鐸《劫中得書記》「李卓吾評傳奇五種十卷十冊 萬曆間刊本／……此五種傳奇爲：浣紗記、金印記、繡襦記、香囊記及鳴鳳記。……浣紗記首有三刻五種傳奇總評、甚關重要。初刻或爲荆劉拜殺及琵琶。二刻當爲幽閨、玉合、繡襦、紅拂、明珠。合之凡十五種。……頗疑李卓吾祇評琵琶、玉合、紅拂數種。其後初刻、二刻、三刻云々、皆爲葉畫所僞作、故合刻數種、殆皆爲翻印本。不細校、不知原刻之精美也。」(第四十三條)

『国立中央図書館善本諸目』(増訂本、一九六七年)には「三刻五種伝奇十卷」の名がみえるが、林其賢『李卓吾事蹟繫年』

(台北・文津出版社、一九八八年)によると、いずれも末頁に「長樂鄭振鐸藏書」と書き入れがあり、鄭振鐸『劫中得書記』の記録する本であるという。

(3) 林其賢前掲書によれば、この『繡襦記』の封面には綢秋居士癸未十一月十四日の次のような題跋が見られるという。(癸未は一九四三年)

「此繡襦記二卷、爲明末蘇州刊本。友人趙裴雲爲予得之武進焦陶氏、而此書歸予未二月、蘭泉卽下世、閱之有人琴之痛、此書題『李卓吾批評』、實卽吳人葉書所托名。予尙有金印合縱記、浣紗記、香囊記等、亦皆葉氏僞評者。」

(4) 姚燮『今樂考証』が李卓吾評『焚香記』、『玉簪記』の存在を記録するが、現在の収蔵者はわからない。

(5) 書陵部蔵本に見られる。北京図書館蔵本(『古本戲曲叢刊初集』影印)は闕葉。

(6) 書陵部蔵本には序文が見られない。

(7) ちなみに、容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』の巻首に付刻されている「忠義水滸伝叙」は『焚書』巻三所収の「忠義水滸伝序」と同文である。ここでは小説書の問題にはふれない。

(8) 未見。田仲一成「明末文人の戲曲観」(『東洋文化研究所紀要』第九十七冊、一九八五年)は碧筠齋本の系統の本文とする。

(9) 游敬泉本の各齣末にある「釈義」にはこの種の校記の類がみられるが、これは先行の同系統本のそれが持ち込まれたものである。

(10) 蒋星煜「李卓吾批本《西廂記》的特徵、真偽与影響」(『明刊本西廂記研究』 中国戲劇出版社、一九八二年、一〇二頁)。

(11) 同前。

(12) 島田虔次『中国に於ける近代思惟の挫折』(筑摩書房、一九四九年)